平成28年度
鹿児島大学
FD報告書

鹿児島大学FD委員会
KAGOSHIMA UNIVERSITY Faculty Development

平成28年度　鹿児島大学FD報告書

CONTENTS

Ⅰ. 平成28年度FD報告書作成にあたって

■ 鹿児島大学FD委員会委員長（教育担当理事）・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

Ⅱ. 鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針 4

Ⅲ. 鹿児島大学のFD活動

第1部 全学的取組 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

■ 新任教員FD研修会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

■ FD・SD合同フォーラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

■ 学生・教職員ワークショップ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

■ 鹿大版FDガイド第12号、第13号の発刊にあたって・・・・・・・・・・ 23

■ 教育センター（共通教育）のFD活動

高等教育研究開発部 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

外国語教育推進部 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33

第2部 各学部・研究科のFD活動報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35

■ 法文学部、人文社会科学研究科

■ 教育学部、教育学研究科

■ 理学部

■ 医学部

■ 歯学部

■ 工学部

■ 農学部、農学研究科

■ 水産学部、水産学研究科

■ 共同獣医学部

■ 理工学研究科

■ 医歯学総合研究科

■ 保健学研究科

■ 司法政策研究科

■ 臨床心理学研究科

■ 連合農学研究科

I 平成28年度FD（ファカルティ・ディベロップメント）報告書作成にあたって

鹿児島大学FD委員会委員長（教育担当理事）
清原 貞夫

鹿児島大学FD委員会委員長（教育担当理事）に就任して４年となり、本学のFD活動についても、その意義と理解は徐々に定着してきました。各学部の教育研究職員、教育センターメンバー、事務系職員みなさんの努力の下、年間を通してそれぞれのディベロップメントに向かって精進してまいりました。

FD委員会のミッションは、本学が掲げる教育理念・目標を達成するための教員の教授法の開発、授業力アップ、学習効果をあげるための学生支援です。昨今ではさらに、各学部のカリキュラム・プログラムの再構築への提言も求められています。平成22年度以降のFD委員会の活動の詳細は、
HP（https://www.kagoshima-u.ac.jp/education/fd.html#000825）をご覧ください。

平成28年度も今まで同様、「新任教員FD研修会」、「学生・教職員ワークショップ」、「FDガイド」の3つのワーキンググループが企画・運営し、「FD・SD合同フォーラム」は教育改善担当学長補佐を中心として運営に携わる体制としました。

継続的な取り組みとして以下の5項目を行いました。

・新任教員FD研修会「アクティブ・ラーニングを取り入れた授業の実践方法」
・FD・SD合同フォーラム「自ら学ぶ学生を育てるための教職員の役割」
・学生・教職員ワークショップ「受講生が積極的に発言・行動する授業へのヒント～番組司会の経験からのアドバイス～」
・FDガイド第12号「ポートフォリオの活用」、第13号「アクティブ・ラーニングの実施例」のテーマで発行
・平成26・27年度に引き続き、大学IRコンソーシアム学生調査（１年生調査、上級生調査）の実施

また、平成28年度は鹿児島大学全専任教員の75％以上がFD活動に参加いたしました。
引き続き、全学をあげてFD活動に取り組む所存です。

FD活動は教職員個々人の向上意識と自発的な取り組みが不可欠であり、教育を改善するには多大な時間と労力が必要です。授業力アップには各教員の最も大切にする価値に根ざすことが肝要であり、その中心的「核」となるものは各人の研究領域での活動であると思います。したがってFDでは研究活動が教育に密接に関わることを自覚し、教授法の向上とキャリア形成を同時に目指し、全教職員が一歩一歩粘り強く、研究・教育活動を継続推進してもらいたいと念じています。

平成28年度　FD活動一覧

6月	共通教育前期授業公開・授業参観
8月	平成27年度鹿児島大学FD報告書の発行
	第1回英語教員ワークショップ
9月	新任教員FD研修会
10月	FD・SD合同フォーラム（大学地域コンソーシアム鹿児島FD・SD活動事業部会と共催）
	学生・教職員ワークショップ
	鹿大版FDガイド第12号の発行
	共通教育後期授業公開・授業参観
11月	大学IRコンソーシアムアンケート実施
2月	鹿大版FDガイド第13号の発行
	第2回英語教員ワークショップ

平成28年度　FD委員会委員名簿

所　属	氏　名	所属ワーキンググループ
理事（教育担当）	清原 貞夫	
副学長（共通教育担当）	飯干 明	
学長補佐（教育改善担当）	大前 慶和	
教育センター高等教育研究開発部長	寺床 勝也	FD研修会
教育センター高等教育研究開発部	伊藤 奈賀子	
教育センター高等教育研究開発部	中里 陽子	FDガイド
法文学部	平井 一臣	FDガイド
教育学部	池川 直	FD研修会
理学部	半田 利弘	学生・教職員ワークショップ
医学部	新地 洋之	学生・教職員ワークショップ
歯学部	後藤 哲哉	FD研修会
工学部・理工学研究科	甲斐 敬美	FDガイド
農学部	坂巻 祥孝	学生・教職員ワークショップ
水産学部	江幡 恵吾	FD研修会
共同獣医学部	大和 修	学生・教職員ワークショップ
医歯学総合研究科	田川 まさみ	FDガイド
司法政策研究科	米田 憲市	FDガイド
臨床心理学研究科	松木 繁	学生・教職員ワークショップ

II 鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針

平成26年7月17日
教育研究評議会決定

鹿児島大学(以下「本学」という。)は、鹿児島大学学則(平成16年規則第86号)第2条において、鹿児島大学憲章の下に、広く知識を授けるとともに深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させ、もって学術文化の向上に寄与するとともに自主自律と進取の精神を持った有為な人材を育成することを目的とすると定めている。本学は、この教育研究上の目的に根ざした人間を育成することができるように、質の高い教育を実施する責務を負っている。そのためには、大学として、教育の内容や方法の開発・改善を組織的かつ継続的に行い、より実質的なものへとしていく必要がある。

(目的)

第1　この指針は、本学におけるファカルティ・ディベロップメント(以下「FD」という。)を推進していくために必要な事項を定め、教育の内容や方法の開発・改善及び教育研究に関する研修についての責務を明記することで、教育の質の向上及び学生支援の円滑な遂行を図ることを目的とする。

(定義)

第2　この指針において、FDとは、大学、部局等、そして教員が、本学の教育理念を実現するために、カリキュラム及び授業の内容や方法を開発・改善することにより、教育の質の向上を図るとともに、学生支援を行う自発的な取組を指す。

2　この指針において、「部局等」とは、学部、研究科及びセンター等、FD活動において組織的な取組を実施する主体を指す。

3　この指針において、「教員」とは、本学の常勤及び非常勤の教員を指す。

(大学の責務)

第3　本学は、その教育理念や教育目標を実現するために、全学のFD活動の内容や方法を点検・評価し、その結果を踏まえ、適宜、各部局の環境整備及び各教員のFDへの取組に対して支援を行う。

(部局等の責務)

第4　部局等は、学部・学科等のカリキュラムが教育目標やアドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及びディプロマ・ポリシーと整合しているかどうかを点検・評価し、必要に応じて、カリキュラムの開発・改善に努め、教育の質の向上を図る。

(教員の責務)

第5　本学の教員は、自らが担当している授業の目標やシラバスの検討を随時行い、学生理解・支援、授業内容、授業方法、教育評価及びカリキュラム開発・改善に関する知識・技能を高めることに努める。

Ⅲ 鹿児島大学のFD活動

第1部

全学的取組

平成28年度 新任教員FD研修会

1. 概要

テーマ　アクティブ・ラーニングを取り入れた授業の実践方法
日　時　平成28年9月6日(木)13:30～16:30
場　所　郡元キャンパス 学習交流プラザ2階 学習交流ホール
対　象　平成27年7月2日～平成28年7月1日の間に本学に採用された新任教員
参加者　32名

2. 研修会の趣旨

本研修会は、主にこの1年間に鹿児島大学に採用された教員が、本学が目指す教育を理解し、それぞれの教育活動として推進することを目的としている。

今回の研修は、「鹿児島大学の教育理念を達成するための、初年次セミナーの教育方法と教員の役割」についてミニレクチャーを受講し、平成28年度から開講されている「初年次セミナーⅠ」を事例に、その現状と課題について3名の教員からの報告を受けた後、その課題についてグループディスカッションを通じて、アクティブ・ラーニングの活用方法とスキルを整理し、実際の教育活動へ展開できることをねらいとして企画した。

3. 当日のプログラム

12:30	開会挨拶	清原 貞夫(鹿児島大学教育担当理事、鹿児島大学FD委員会委員長)
13:40	ミニレクチャー	「鹿児島大学の教育理念を達成するための、初年次セミナーの教育方法と教員の役割」 伊藤 奈賀子(鹿児島大学教育センター高等教育研究開発部准教授、鹿児島大学FD委員)
14:10	事例紹介及び報告	「初年次セミナーⅠ」からみたアクティブ・ラーニングの現状と課題 テーマ1「アクティブ・ラーニングを取り入れた『初年次セミナーⅠ』の事例紹介」 寺床 勝也(鹿児島大学FD委員) テーマ2「『初年次セミナーⅠ』の現状と課題 ～授業者からの報告～」 池川 直(鹿児島大学FD委員)、後藤 哲哉(鹿児島大学FD委員)
14:50	休憩	
15:05	グループディスカッション	テーマ「どうすればもっとアクティブ？ ～アクティブ・ラーニングを取り入れた授業における教員の役割～」 ファシリテーター:池川 直、江幡 恵吾、後藤 哲哉
15:45	リフレクション・ プレゼンテーション	各グループの代表者1名
16:25	閉会・アンケート記入	
16:30	解散	

(司会進行:江幡 恵吾 鹿児島大学FD委員)

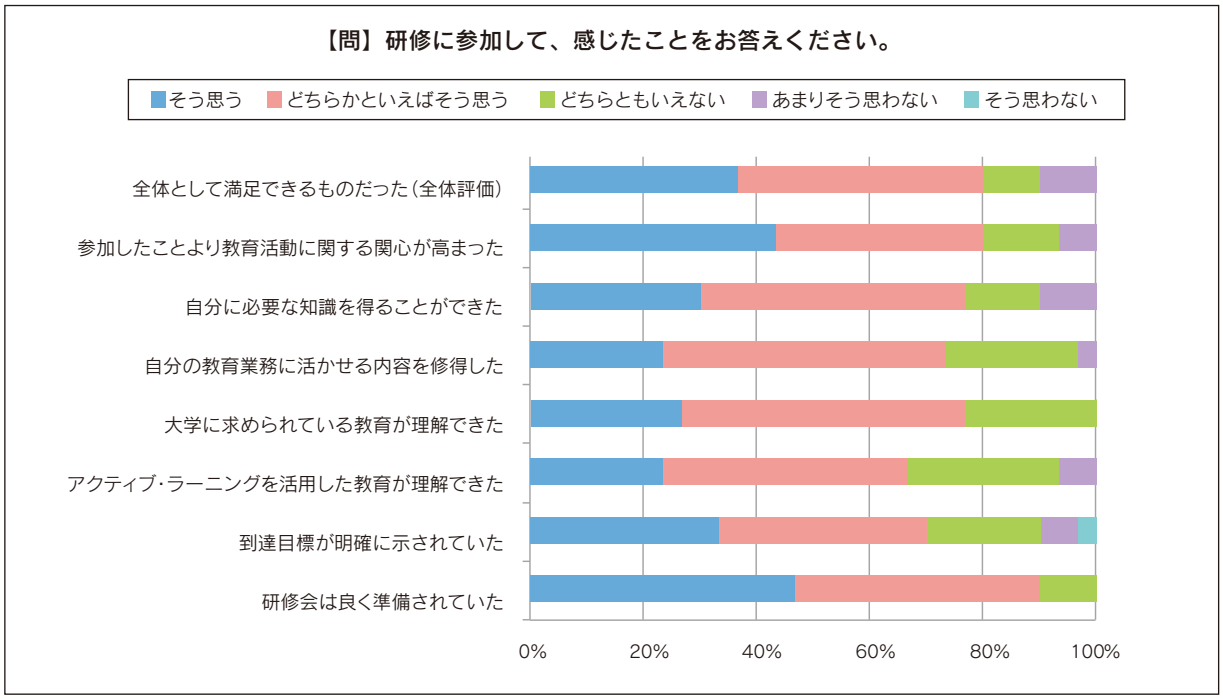
4.研修会のまとめ

まず、清原教育担当理事より、本学が取り組む全学的な教育改善は、本学が目指している地域への貢献、地域人材の育成、産業の活性化と学士の質保証であり、そのための平成28年度から取り組む共通教育改革の意義について述べられた。その後、教育センター高等教育研究開発部 伊藤奈賀子准教授による「鹿児島大学の教育理念を達成するための、初年次セミナーの教育方法と教員の役割」と題して、本年度からスタートした初年次セミナーの鹿児島大学の教育目標・方針との関連性、アクティブ・ラーニングについて、大学IRコンソシアーム・アンケートデータから見た鹿児島大学の1年生についてのレクチャーがあった。さらに、実際に初年次セミナーⅠを担当した教育センター高等教育研究開発部長（教育学部教授）寺床勝也教授、教育学部 池川直教授、医歯学総合研究科 後藤哲哉教授のビデオ等を使った事例紹介から現状と課題についてのレクチャーの後、参加者によるグループディスカッションを行った。

グループディスカッションでは、7グループに分かれてアクティブ・ラーニングを取り入れた授業においてどうすれば授業を能動的に行うことができるのであろうか、また各人の授業実践から見えてくる課題への解決策から、教員はどのような役割を担えばよいのかについて議論がなされた。プレゼンテーションでは、教員がアクティブ・ラーニングの理解を深めること、学部間の目標（国家試験有無等）の差異による授業へのアクティブ・ラーニング活用方法のあり方など各グループで検討してきた内容を、各グループの代表者がプレゼンテーションし、今回の研修会での学びを共有することができた。

全体のアンケートでも、「参加したことにより、教育活動に関する関心が高まった」「大学に求められている教育が理解できた」などの全項目で、高い満足度が示された。

（事後アンケート結果より抜粋）



（グループディスカッションの様子）

（プレゼンテーションの様子）

【自由記述意見例】

アクティブ・ラーニングについて、欲しい情報があればお書きください。

- 他の先進国でのアクティブ・ラーニングの現状について知りたい。
- 成功例と失敗例を知りたい。
- 学生のモチベーションを上げる工夫について知りたい。
- 具体的なFDのための技術を知りたい。例えば、授業デザインのためのスキル（あればWord やExcelのモデルなど）、クリッカーの使い方（動画、テロップの入れ方）、反転授業のためのツールやアプリ、ソフトなどの使い方などなど。
- アクティブ・ラーニングの具体的な応用例や各手法について知りたい。

本研修会及び今後参加を希望するFD研修会のテーマについて、ご意見、ご要望を自由にお書きください。

- ミニレクチャーを聞き、学生の状況、態度の動向は理解できたが、それらが鹿児島大学のめざす教育理念と一致するのか。また、一致しないのであればどのように改善すればいいかが示されていなかった。
- 「初年次セミナー」という授業タイトルからは、授業の中身が予測できなかった。情報検索の仕方やプレゼン能力を磨く授業内容はよかったと思う。ただグループで行う必要はない（個人で行う方が良い）。
- 学生に対して相手に物事を伝えることの技術（プレゼン能力）を教えているのに、教員が実行していないことが印象的だった。
- 研修会のテーマと内容が乖離している。アクティブ・ラーニングに関することなのか、初年次セミナーに関することなのかが分からなかった。導入例とその効果を紹介するのであれば、初年次セミナーⅠの授業評価アンケートを引用すべきで、学生の声は反映されていなかった。これが、アクティブ・ラーニングに対する学生の評価になるので、実施例を紹介するだけでは、あまり意味があるとは感じにくい。
- アクティブ・ラーニングの定義、理想像、意義が分からない。
- 教員にも経験が必要だと考えた。例えば、「初年次セミナー」を見学させてもらえるような仕組みがあれば良いと思った。
- 「アクティブ・ラーニングとはなにか？」という説明や資料がないので、まずそれを説明した上で本研修の話に入ってほしかった。それを理解した上で話を聞くと聞かないとでは違う。（何となく理解しましたが）
- 学生にプレゼンをさせている動画があったが、ただ自由に調べさせて発表させるのではなく、発表に使うソフトの使い方や、発表をする上でのポイントなど、まとめ方をある程度教えるべきだと思った。
- 単に調べて来いと言っているだけでは、資料のアンケート結果のように、個々のプレゼン能力が上達しないとなるのはある意味当然。
- 発表の回数の機会が少ないことが、プレゼンテーション能力が、入学時から上達しないという問題の理由ではないと思う。
- 教員の研修会の機会が必要だと思った。

（文責：教育学部　池川 直）

平成28年度 FD・SD合同フォーラム

1. 概要

テーマ 自ら学ぶ学生を育てるための教職員の役割

日　時 平成28年10月8日(土)13:00～16:30

場　所 郡元キャンパス 学習交流プラザ2階 学習交流ホール 他

招聘講師 夏目 達也 氏(名古屋大学高等教育研究センター教授)

参加者 108名(参加校:鹿児島大学、鹿児島国際大学、志學館大学、鹿児島純心女子短期大学、鹿児島県立短期大学、第一工業大学、鹿屋体育大学、第一幼児教育短期大学、鹿児島工業高等専門学校、鹿児島純心女子大学、名古屋大学、同志社大学)

主　催 大学地域コンソーシアム鹿児島、鹿児島大学FD委員会

プログラム

13:00	開会挨拶　清原 貞夫(鹿児島大学教育担当理事、鹿児島大学FD委員会委員長)
13:10	趣旨説明　伊藤 奈賀子(鹿児島大学教育センター高等教育研究開発部准教授)
13:20	基調講演　「自ら学ぶ学生を育てるために何が必要か」　夏目 達也 氏
	参加人数:108名(うち鹿児島大学以外からの参加者数58名)
14:30	休憩
14:40	グループ・ディスカッション「自ら学ぶ学生を育てるために私たちにできることは」
	ファシリテーター:出口 英樹(鹿児島大学かごしまCOCセンター特任准教授)、伊藤 奈賀子
	参加人数:68名(うち鹿児島大学以外からの参加者数39名)
16:20	閉会挨拶　野呂 忠秀(鹿児島県立短期大学長)
	総合司会:當金 一郎(第一工業大学情報電子システム工学科教授)

2. 開催趣旨

我が国の高等教育における喫緊の課題の1つは、単位の質保証である。単位制度は授業時間外学習を前提としているものの、学生の実態調査から明らかとされていることに、授業時間外学習は不足していると言える状況である。単位の質保証の背後にある考え方、また教職員に求められるFD・SDとはどのようなものなのかについて、基調講演を企画した。さらに、単位の質保証に向けて、具体的な課題およびその改善について、教職員合同のグループ・ディスカッションを企画した。

3. 夏目達也教授による基調講演「自ら学ぶ学生を育てるために何が必要か」

（夏目 達也 教授による基調講演）

基調講演は、学習交流プラザ2階の学習交流ホールが会場となった。講演内容の概略は以下の通りである。

大学間の競争激化、国際競争の激化を受け、GP等競争的資金による取り組みの促進、3ポリシーの整備、厳格な成績評価の要求、認証評価・法人評価、中教審答申における各種提言などの政策動向が見て取れる。こうした流れにおいて、学生の学習成果が問われており、「何を教えるのか」ではなく、「何ができるようになるか」が重要になっている。知識・スキルよりも幅広い能力・資質の修得が問われているのであり、「学士力」「社会人基礎力」「就職基礎能力」などと表現されている。

これに対し、大学生の学習行動の現状はどうか。概して、「授業への参加度は高くなく」、逆に「教員への依存度は高い」との調査結果が示されている。基礎的内容が中心の授業、演習形式よりも教員が知識・スキルを教える講義形式、興味のない授業であっても楽に単位が取れる等、学生は自発的学習が必要とされる授業「ではない」授業を好むようである。一方、能動的態度で学習することの必要性自体は必要であると学生は認識している、との調査結果もある。しかしながら、「授業中に意見を述べる」、「小テストやレポートが課される」「課題提出物に対して適切なコメントが付されて返却される」などの経験機会の提供は多くない。ここに、高等教育における教育・授業間の転換が必要であると言える。すなわち、「教員中心から学生中心へ」の転換である。教育改善において、学生をお客様扱いにせず、巻き込むことが重要である。そのためには、授業外の多様な場面で学生に働きかける必要性があり、また教職員の協働も不可欠である。

学生の主体的な学習を促す仕組みは多くあり、初年次教育の工夫、アクティブ・ラーニング、各種セミナー、学生論文コンテスト、スタディ・ティップス（学び方のヒント集）等が挙げられる。いずれも2つの要素を満たすことが重要で、第1は学生の自己決定を尊重すること、第2は学生が他者の指導・支援を受容するようになること、である。名古屋大学では高等教育研究センターを中心にFDおよびSDに取り組んでおり、テキストを用意している。学習と教育の双方に対するティップス集で、webでも公開している。また、図書館内にラーニング・コモンズを構築した他、東海地区では「大学教育改革フォーラムin東海」も教職協働で開催している。

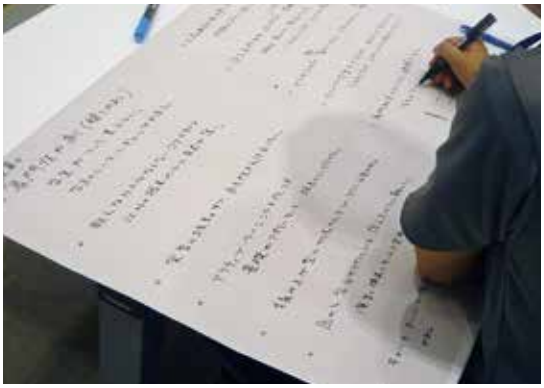
4. 出口英樹特任准教授・伊藤奈賀子准教授によるグループ・ディスカッション

会場を1階に移し、教員・職員混合のグループを作ったうえで、ワールドカフェ方式に準じてグループ・ディスカッションを行った。特定の課題は与えず、日常の課題を出し合い、明日から実践できる業務改善のアイデア創出を試みた。

グループ内には、司会者、報告者、記録者（ただし、まとめた内容だけを記載するのではなく、各自が思いついたこと等をその都度記載して構わない）を置いた。また、グラウンドルールとして、「上下関係を持ち込まず、対等な立場で議論する」、「前向きに発言する」、「発言はコンパクトに」、「他人の話を遮らない」、「スマホ、タブレットは禁止」、「発言は質より量」を設定した。

席替えを1回行ったが、ホスト役を残さなかったため、やや席替え後のディスカッションに難が残ったが、おおよそ活発なディスカッションが実現した。

（グループ･ディスカッション会場）



（アイデアの書き出し）

5. アンケート集計結果

アンケートの集計結果を以下に掲載しておく。FDないしSDは、各校で独自に展開するにはやや無理があることが伺え、コンソーシアム参加校による合同開催には意味があると思われる。来年度以降も、FD･SD合同フォーラムの開催が期待される。

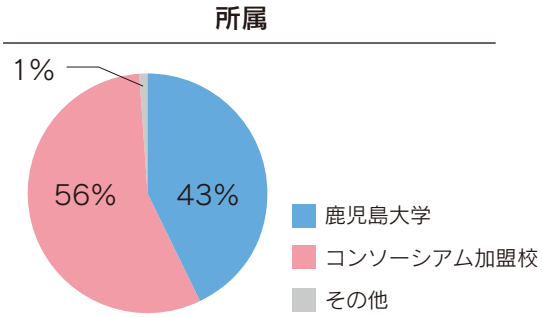
1.参加者ご自身について

①所属

●鹿児島大学　32名

●大学地域コンソーシアム加盟校　42名

●その他　1名

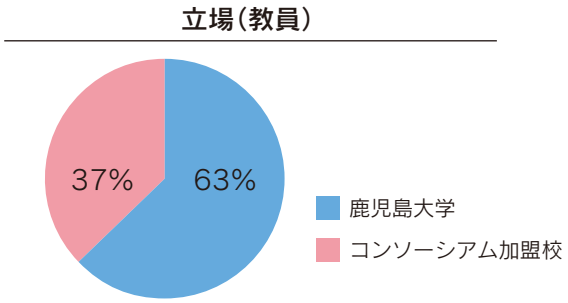


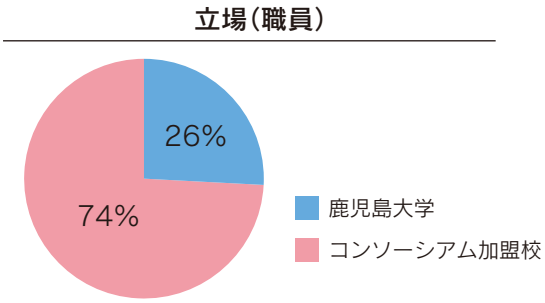
②立場

●教員　鹿児島大学22名、大学地域コンソーシアム加盟校　13名

●職員　鹿児島大学10名、大学地域コンソーシアム加盟校　29名

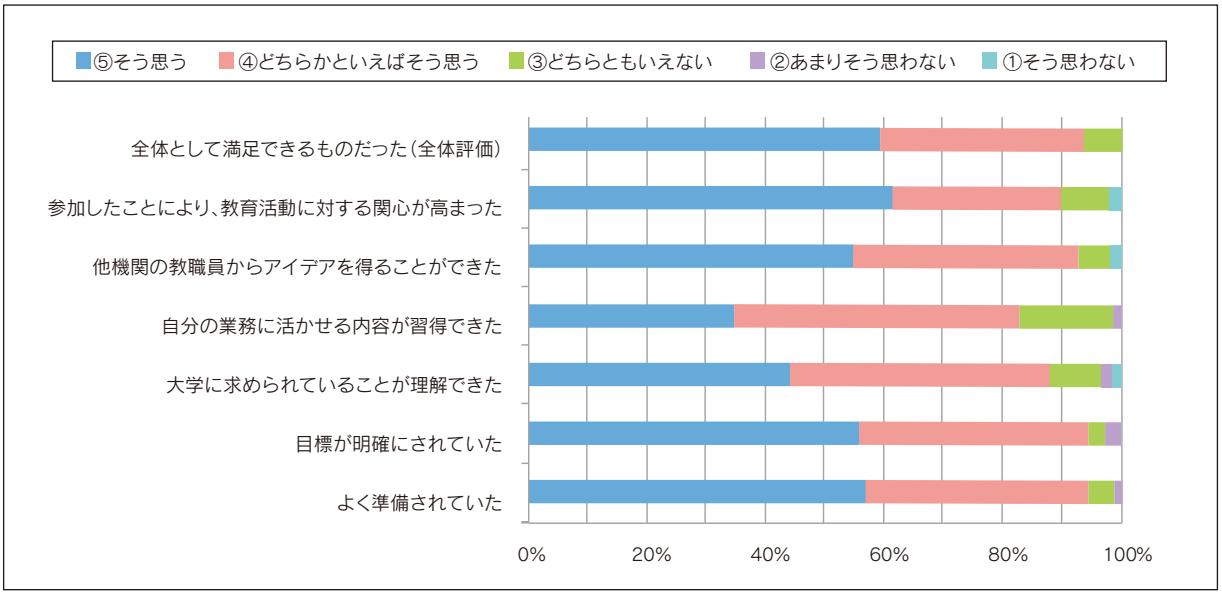
●その他　1名





2.参加して感じたことをお答えください。

設　問	⑤ そう思う	④ どちらかといえばそう思う	③ どちらともいえない	② あまりそう思わない	① そう思わない
よく準備されていた	42	27	3	1	0
目標が明確にされていた	41	28	2	2	0
大学に求められていることが理解できた	32	32	7	1	1
自分の業務に活かせる内容が習得できた	26	35	11	1	0
他機関の教職員からアイデアを得ることができた	40	29	3	0	1
参加したことにより、教育活動に対する関心が高まった	45	21	6	0	1
全体として満足できるものだった（全体評価）	43	26	4	0	0



3.本フォーラムの実施曜日について、当てはまるものをお選びください。

- ●平日の方が参加しやすい　9名
- ●土曜の方が参加しやすい　41名
- ●どちらでもよい　23名

4.今回のフォーラムについてのご意見・ご感想等を、ご自由にお書きください。

- 目標の設定が参加者自身で取組可能な内容とされていたので、明日以降の業務に活用可能な具体的な成果となり良かった。
- 職員として参加したが、教員の方の司会のうまさなど、勉強させていただく事が多く為になった。
- フォーラムの目的、理解、思考すべき対象がはっきりとした構成でとても良い勉強になった。
- 授業改善のヒントになるものが沢山学べてよかった。
- 成長するティップス先生は名古屋大学在籍にも大変役立った。Webで公開されているということで大変有難い。
- 学生を教育改善に巻き込む事が上手く出来れば良いと思う。
- 教職員大学院の準備のこの時期に沢山のことを学べて良かった。
- 職種の違う方との情報交換が新鮮だった。
- ディスカッションのオーガナイズをきちんとしてもらえば、より良くなったと思う。
- 他機関との情報交換が出来て非常に参考になった。
- 夏目先生の講演に励まされ、グループワークで明日からの教壇に向かう気持ちを整えることが出来た。
- 様々な意見が聞けてよかった。
- もう少し具体的な話も聞きたかった。
- 有意義なディスカッションが出来た。
- 一般的な説明をされたが、一定の学力水準の学生が入学してくる国立大学固有の問題と、そこでの学生の教育方法はどうあるべきかをもう少し示して欲しかった。入学時の学力を無視して一律のメソッドを導入することは疑問がある。
- 他機関の教員、事務職員との交流が出来、良い情報交換の場所となった。
- 実践した事例などを詳しく紹介して欲しかった。
- 地域の違いによる学生の質の違いが分かればよかった。
- 有意義な話が聞けた。
- 時間配分に工夫が必要。
- テーマをもう少し絞った方がいいのでは。
- 夏目先生の講演がすばらしかった。今後の参考にしたい。
- 自分の大学のFD、また自分自身の活動の大きなヒントを得ることが出来た。
- 他大学の教職員を交えて討論が出来て良かった。
- 勉強になった。
- 同じグループの方が色々な意見を出しくれたので、楽しくディスカッション出来た。
- 素晴らしい出会いに、やる気が出た。
- 前方だったが、スライドが見えにくかった。後方は見えなかったのでは。
- フォーラムの開催は日曜日も含めて検討して欲しい。
- コンソーシアムを利用して県内の大学改善に積極的に取り組みたい。
- このような他大学との教職員ふれあう機会を増やし、大学単位でなく県内の大学が繋がりを持って他県への流出学生を少しでも減らしていくことが、まず取り組むべき事だと思う。

5.本フォーラムで今後扱ってほしいテーマや、実施してほしい企画等がありましたら、自由にお書きください。(現在気になっていること、知りたいこと等、どのようなことでもかまいません。)

- 異種グループと同時に、違う大学の同種のグループとの協議もまた有意義だと思う。
- 全国と鹿児島の差を明らかにする。
- アクティブ・ラーニングの事例。
- 旧帝大、中央の私大、地方の国立大、地方私大のそれぞれのグループで効果を上げている教育メソッドの事例を紹介して欲しい。
- 配慮が必要な学生をどのように社会に送り出すか。
- 具体的な方法論に特化したプログラム。
- 教育改善コネタ集をまとめて欲しい。
- 障害学生対応
- 教職協働
- 名古屋大学のティーチング・ティップスはとてもユニークで役立つサイトだと思う。こういった有意義な情報をいかにして共有できるかということを考えるシンポジウムがあれば有意義。(各大学が独自に頑張るというだけでは効率的でない)

(文責:法文学部　大前 慶和)

平成28年度 学生・教職員ワークショップ

1. 概要

テーマ 受講生が積極的に発言・行動する授業へのヒント ～番組司会の経験からのアドバイス～

日時 平成28年10月25日(火)16:10～19:10

場所 郡元キャンパス　学習交流プラザ2階　学習交流ホール

参加者 60名(学生23名、教員33名、職員4名)

対象者 教育に関心のある学生、教育に関わっている教職員

学生…各学部より推薦を受けた学生、自主参加希望者
教員…各学部、学共施設等の学生教育に関わっている教員、教務委員、FD委員
職員…各学部学生系職員、学生部職員

平成28年10月25日、「受講生が積極的に発言・行動する授業へのヒント～番組司会の経験からのアドバイス～」というテーマの下、学生・教職員ワークショップが郡元キャンパス学習交流プラザ2階学習交流ホールで開催され、60名(学生23、教員33、職員4)の参加があった。

今回のワークショップでは、まず初めの1時間で、担当のFD委員と個人的に縁がある、東京のテレビ放送局アナウンサー(以下、講師)にご講演いただき、「受講生が積極的に発言・行動する授業」のためのアドバイスを教員・学生向けにいただいた。

冒頭、清原貞夫FD委員長(教育担当理事)が開会挨拶で昨今の大学改革で「大学を出た学生が社会で40～50年働ける汎用性のある教育」と「予測困難な時代に自分で考えられる人材の育成」が求められていることを紹介された。続いて半田利弘FD委員(理学部)によって本ワークショップの趣旨説明がなされた。具体的にはアクティブ・ラーニングを取り入れた授業を50%以上にするという鹿児島大学の第3期中期目標実現にあたって、多くの教員はどうしたらアクティブ・ラーニングが効果的に取り入れられるか、わからないで困っている。同時に学生もどのように学べばよいかわからないで困っている。そのため、伝える仕事の第一人者である現役アナウンサーの講師から、伝えるためのコミュニケーションのヒントを頂いて、グループ討論でアイデアを出し合いましょうという内容であった。

講師による講演では、会場の参加者と会話のやり取りをし、同時に配布資料の空欄個所を参加者に埋めさせながら、以下のような項目について約40分間のお話を頂いた。

①自分はあがり症のしゃべりヘタであった。
②会場に手を挙げさせても、手はあがらない。
③「こんなこと言っても良いのかな？」「あんなこと言って失敗だったかな？」と思うから手が上がらないけど、マイクを向けると、学生もしゃべることができる。
④失敗こそ宝である。
⑤人の話を受け止めることが、自分の言いたいことにつながる。
⑥TV番組制作ではまず「つかみ」と「柱立て」を決めていく。
⑦参加三形態「学生が聞く」「学生に訊く」「学生同士が話す」を意識して、授業の柱を組むのが重要。

後半のグループ討論では、講師を含む参加者が、それぞれ5～7人の6班に分かれ、「どのようにして受講生が積極的に発言・行動する授業が実現できるか」というテーマで班内討論を行った。このワークショップでは、学生の参加者数が多かったため、どの班も学生と教員との議論が活発になり、最終的に前向きな具体策が数多く発表された。

具体的な対策は多数出されたが大別すれば以下の4つに分類された。(1)授業の雰囲気づくり、(2)質問しやすい仕組み、(3)情報量過多による一方的授業の回避、(4)学生の力を引き出す仕組み。多くの班が着目したのは雰囲気づくりのための、「つかみ」や学生同士の「グループワーク」の採用である。また、情報量過多の対策として予習復習の大切さやコミュニケーションペーパーの利用、とともに、教員が我慢して授業の時間を削り学生たちに話し合わせ考えさせる時間を取るというアイデアなども挙げられた。

討論後には大和修FD委員および講師から「学生と教員が良くコミュニケーションが取れて、本ワークショップこそ、アクティブ・ラーニングそのものだった。」というコメントを頂いた。

最後に半田委員が、このワークショップ全体のまとめとして、「鹿大の学生教員全体の人数から考えれば、今回参加している人は少ないので、このような有意義な会があることをもっと周りの人に広めてほしい。このワークショップで終わりではなく、ここからが、受講生が積極的に発言・行動する授業の始まりだと思ってほしい。」という提案をして、和やかながら前向きな空気を生み出して閉会した。

（半田利弘FD委員による趣旨説明）

（ホワイトボードを前に討論する各班の様子）

2. 事後アンケート結果

事後アンケート

2016.10.25

本日は、ワークショップへのご参加ありがとうございました。FD委員会では皆様のご意見を参考に活動を改善し、新たな企画を計画いたします。皆様の率直なご意見をお聞かせください。
（選択の部分は、番号を◯で囲んでください。）

1. ① 学 生　② 教 員　③ 職 員

2. 本日のワークショップは有意義でしたか。
① 全くそう思わない　② あまり思わない　③ どちらでもない　④ 少しそう思う　⑤ 非常にそう思う

3. あなたは、積極的に参加しましたか。
① 全くそう思わない　② あまり思わない　③ どちらでもない　④ 少しそう思う　⑤ 非常にそう思う

4. このワークショップに参加して、何が得られましたか。

5. ワークショップに対するご意見等を自由にお書きください。

※今後、FD委員会で取り上げてほしいテーマがありましたら、お書き下さい。

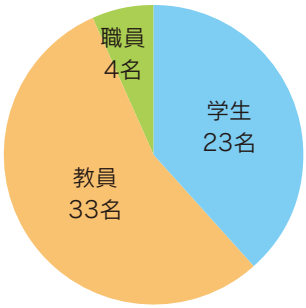
ご協力ありがとうございました。

事後アンケート（まとめ）

①ワークショップ参加者の詳細

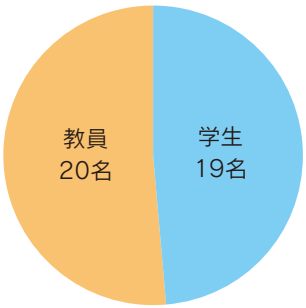
（当日の出席者）

学　生	23名
教　員	33名
職　員	4名
合　計	60名



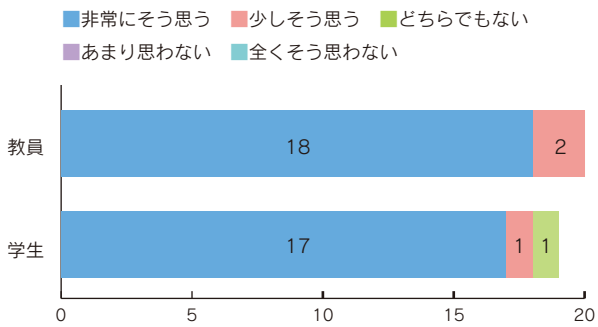
（アンケート回答者）

学　生	19名
教　員	20名
職　員	0名
合　計	39名



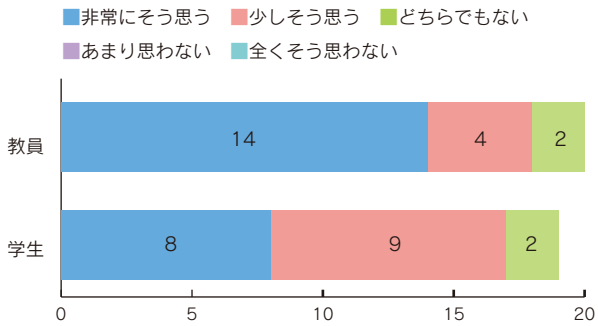
②本日のワークショップは有意義でしたか。

	全体	学生	教員	職員
非常にそう思う	35	17	18	0
少しそう思う	3	1	2	
どちらでもない	1	1	0	
あまり思わない	0	0	0	
全く思わない				
計	39	19	20	0



③あなたは、積極的に参加しましたか。

	全体	学生	教員	職員
非常にそう思う	22	8	14	0
少しそう思う	13	9	4	
どちらでもない	4	2	2	
あまり思わない	0	0	0	
全く思わない				
計	39	19	20	0



④このワークショップに参加されたご感想をお書きください。(自由記述)

学生

- 多くの人の意見を聞いて、様々な考えを目にすることで自分の考えを見直すことが出来た。
- 先生と学生の意見を交えながら話し合いが出来て、とても楽しかった。講師の話術を取り入れていけるよう、沢山失敗しようと思った。授業へのヒントというタイトルであったが、人との接し方を学べて本当によかった。
- 正直、ディスカッションなどは苦手だと感じていたが、講師がおっしゃったように、自分から積極的に参加し、話すことで自分自身が分かった。参加して本当に良かった。他の学生にも拡げたい。
- 講師の話は、頷くことばかりだった。「失敗こそ宝」という言葉を聞き、今まで間違っていたら恥ずかしいと手を挙げていなかった自分は損していたんだと思った。参加して本当によかった。また、グループディスカッションでは普段聞けない先生方の話が聞けて、先生方もいろいろな葛藤を抱えて授業をされているのだと気付いた。
- 受講している授業のあり方について考える機会になった。授業に対する先生の思いと学生の思いを共有できたことに大きな意味があるのではと感じた。
- 講演で、自分から発言していいのだ、失敗してもいいのだという事を学べた。その後のディスカッションでは、それを意識して発言できたし、より積極的に発言する授業への考え方が拡がった。
- まず、日頃の自分が、どのような態度で授業に臨み、どのような授業を受講しているのか見直すことが出来た。ワークショップを通して、自分たち学生の願いが教員に届くことを願いたい。
- 教員側の思いを知らなかった。ここまで、教員が自分たちのことを考えている事を知り、自分自身の授業態度を改めようと思った。
- 自分自身があまり積極的に発言や行動する学生でないため、何か自分が変わるヒントはないかと参加した。講師の話の中に、これから自分も少しずつ実践できそうなことが多く有り、本当に来て良かった。また、グループディスカッションも様々な方と意見交換が出来てよかった。
- 学生として参加したが、先生側の意見を聞き、これまで先生方が、教育のためにいろいろ考えて取り組まれていることを初めて知ることが出来た。
- 議論内容が自分に関わることであったため、雰囲気も楽しく発言しやすかった。自分が日常感じていることを伝えると同時に、先生方の思いも知ることが出来、白熱した議論の中で時間が過ぎるのもあっという間だった。講師の話も為になり、参加して良かったと思った。
- 文系も理系もバラバラ、先生も学生もバラバラで、意見の統一が全く出来なかったが、それがよかった。先生側の意見を聞いて、学生に期待を持たれていることがわかりこれからも積極的に授業等参加したいと思う。講師のお話も面白かった。
- 先生と対等に話すことが出来る場に参加出来てすごく良い機会だった。先生方は学生に教える上で、いろんな事を考えているのだと感じた。つかみは大切だと思った。
- アクティブ・ラーニングについて様々な意見を交換でき、大変有意義な時間だった。今後、学生として改善すべき点をしっかり改善していこうと思う。
- 就活にあたり、いろいろな人の話を聞くことが大事だと言われていたし、大学にいる間に出来ることを沢山したいと参加した。
- 私はあまり積極的なタイプではないが、沢山話す事が出来た。このような経験を多くの学生に持って欲しいと感じた。また教員側の悩みを聞いてみて、もっと自分も反応良く対応し、授業にも、もっと参加しておけば良かったと思った。
- 教員や他学部の方と話す機会が今までなかったため、経験できて良かった。
- 様々な方の意見を聞くことができ、よい時間を過ごせた。改めて、教員と学生が親密になる事が積極的な授業に繋がると思った。
- 講師の話が非常に面白く、非常に聞き取りやすかった。参加者と一緒にこの機会を創造している気がして非常に参考になった。

教員

- 楽しく対話が出来た。考えさせられることが多く、授業に応用していきたい。学生と教員の相互作用が最重要だと感じた。
- 学生の積極的な意見が聞けたので、非常に参考になった。講師の提案が具体的で非常に分かりやすく、「つかみ」と「柱立て」の部分は実際的で理解しやすかった。
- アクティブ・ラーニングについて、教員と学生とでいろいろな話が出来て有意義な時間となった。特に学生側の声が聞けてよかった。話し合っていく中で考えさせられる事が多かった。
- 講師の講義と学生と教職員が一緒に参加するワークショップがあったので参加した。
- とても有意義であった。
- もう少し参加者がほしかった。
- 学生の正直な意見は参考になる。
- 講師の話は素晴らしかった。話し方、聞きやすさ、さすがプロ。ポイント良く伝わる話だった。今後の授業について沢山のヒントをいただいた。
- 自分の授業の反省点が見つけられた。改善のヒントも得られた。
- 学生の本拠、普段経験していることに基づいた多角的かつ建設的な提案が出てきた事はよかった。それらのきっかけを作って下さった講師の話がとても良かった。
- 講師のお人柄がにじみ出るレクチャー、普段は考えないような事を考えさせられたグループディスカッション、共に今後の教員としてのキャリアアップに大変参考になりました。有意義な時間が持てた。
- 人数もちょうど良く、講師の血の通った言葉の掛け合いで、我々のアクティブ・ラーニング演習にも熱が入った。多くの準備をして下さった先生方に感謝申し上げます。
- 異業種（放送会）の人、他学部の教員、学生の意見が聞けて参考になった。
- テーマが深刻ではなく、前向きだったので和やか、かつ活発だった。
- 学生の声が聞けて良かった。
- 講演が大変参考になった。またグループディスカッションも大変有意義で、今度の検討課題が明らかになった。
- FD関係の行事に初めて参加したが、自分の授業について考え直す機会となった。学生と一緒に参加というのはとてもいいと思う。
- 面白かった。
- 講義時間が少なかった。
- 以前のワークショップに似ていた。同じようなワークショップを繰り返すのは意味がない。

⑤ワークショップに対するご意見、希望等ございましたらお書きください。（自由記述）

学生

- このようなワークショップは他大学合同でも行うべき。
- とても有意義だった。
- ワークショップがもっと広まり、より多くの教員、学生が参加すれば良いと思った。
- このまましっかり続けて欲しい。
- 講師の話をもう少し長く聞きたかった。
- アクティブ・ラーニングについてしっかり考えることや授業について先生方と意見を交える
- 経験がなかったのでとても参考になった。
- とても面白かった。次回も参加したい。
- これからもこのような会を開催して欲しい。
- もう少し話し合いの時間が欲しかった。時間があっという間に過ぎた。皆さんと話ができ、いろいろな意見を聞けてよかった。
- 自分たちで考え、話し合う時間が十分ありよかった。
- 今回のワークショップは学生、教員にとってとても大切だと思う。もっと広めて、沢山の人に受講してもらえる機会が欲しい。先生方と討論する機会は初めてだったのでとても良かった。もっとこのような機会を増やすべき！
- 討論の時間が少し長かった。時間が押しているとせかされている感じがした。

教員

- このようなワークショップをもっと頻繁に行うとよいと思う。
- 授業の質を高めるためのアクティブ・ラーニングだとは思うが、学生から出た意見で情報量が減ってしまう事が心配だという懸念もあった。
- ワークショップの参加者は教職員と、学生が混じっていて、かつ学生の人数が多い方が良いと感じた。
- すばらしい企画であった。
- 参加している人は意識の高い人が多い。関心を示せない人々にどう動いて貰うかが課題。
- 今回は著名な方が講師であり、もっと参加者がいても良かった気がする。
- 学生と教員を一緒のグループにして話し合うことはとても面白く新鮮だった。
- 出席したら甲斐があると言うことをどうやったら多くの教職員、学生に広められるかを考えなくてはいけないと思う。今回の講義も共有できるようにしたい。
- 有意義な内容の割に参加者が少なかったのが残念。「参加すれば良かったのに」というような、事後レポートや風聞を広める仕組みがあると次の企画でもっと人を集められると思う。
- 同じテーマの第二回目も希望します。
- とても楽しいワークショップでした。良い経験になりました。
- 今後もこのような議論の機会があれば嬉しい。
- ワークショップにより多くの学生、教職員が参加してくれたらと思う。
- 講師の話は良かった。もう少し聞きたかった。概念的な事より、実際に役に立つツールなどの説明が聞きたい。

⑥今後、FD委員会で取り上げてほしいテーマがありましたら、お書き下さい。（自由記述）

学生

- 何のために大学生は大学で学問を学ぶのか。
- 1.2年生でも、参加出来る就職に関する話
- このような会を開いて、次の会までの議題を決め、次回成果を数字で説明する。
- このような話し合える場があったら是非参加したい。ありがとうございました。

教員

- GPAについて
- 学生からの意見が直接出てくるワークショップがよい。
- 今回の企画の続編を期待したい。プロのアナウンサーの講演を数多く聴きたい。
- 今すぐには思いつかないが、今後も新企画を期待している。
- 学問にも選択と集中は必要か。～少子化時代の大学のあり方～

※自由記述は、一部表記を変更し、掲載しています。

（文責：農学部　坂巻 祥孝）

鹿大版FDガイド第12号、第13号の発刊にあたって

平成28年度は、10月（12号）と2月（13号）にそれぞれ「ポートフォリオの活用」と「アクティブ・ラーニングの実施例」を作成、刊行した。

鹿児島大学では、平成28年度より新しい共通教育カリキュラムをスタートさせるなど、全学的に学位の質保証の確立に向けた取り組みを本格化させている。また、初年次教育科目として新たに設けられた「初年次セミナーⅠ」、「初年次セミナーⅡ」は、理系学部と文系学部の学生を混在させた少人数クラス方式を採用し、アクティブ・ラーニングの積極的な導入、効果的な学習方法の習得、プレゼンテーション能力やレポート作成能力の向上等を目指す内容になっている。こうした取り組みが着実に行われるためには、学生の学習状況の把握とそれに基づいた教員と学生の間でのコミュニケーションが不可欠である。また、具体的な授業運営や教育方法について、近年様々な実践例が、やや氾濫気味といえるほど出されているのが実情である。しかし、どこかにモデルがあると考えモデル探しを行うのではなく、鹿児島大学の現場での実践例のなかから教員自身が試行錯誤を重ね、より効果的な手法を追求していくことが重要ではないか。

このような趣旨から、平成28年度のFDガイドでは、改革の過程の途上である授業実践について、鹿児島大学の現場で今何が行われているのかという点に光をあてることとした。身近な実践例から、今後の授業改善のヒントを見つけ出そうということである。

第12号では、ポートフォリオを取り上げた。ポートフォリオを「学生個人の能動的な学習活動の記録であり、作成する過程そのものが振り返りによる学習」ととらえ、ポートフォリオの活用が「学生一人一人に対する丁寧な教育」につながるものであることを説明したうえで、鹿児島大学での先進的な取り組み事例を紹介した。アドバイザー制と結びついたe-ポートフォリオについての工学部の事例、2010年という早い段階からe-ポートフォリオを採用し実践を重ねている医学部医学科の事例、そして専門職大学院の高度な教育と結びついた司法政策研究科の学修ポートフォリオの事例である。

第13号は、アクティブ・ラーニングの実践例を取り上げた。冒頭に紹介した「初年次セミナーⅠ」、「初年次セミナーⅡ」における少人数教育での実践例に加え、大人数形式の講義におけるアクティブ・ラーニングの実践例、学外と連携したPBLの実践例を紹介し、授業形式や授業内容が異なっていても、それに対応したアクティブ・ラーニングのやり方があることを示した。

本年度のWGメンバーは、平井一臣（法文学部）、甲斐敬美（工学部・理工学研究科）、田川まさみ（医歯学総合研究科）、米田憲市（司法政策研究科）、中里陽子（教育センター）であった。

（文責：法文学部　平井 一臣）

FDガイド第12号

FDガイド第13号

教育センター（共通教育）のFD活動

【高等教育研究開発部】

はじめに

平成28年度の高等教育研究開発部会は活動計画として以下の4点を掲げた。このうち、①～③は前年度からの引き継ぎ事項、④は新規事業である。

①共通教育の授業アンケートの実施（前後期　中間アンケートを含む）
②授業改善メモの集約及び教育センターホームページ等での報告
③共通教育の授業公開・授業参観の実施
④共通教育に関するFD研修の立案・実施

1. 共通教育の授業アンケートの実施（前後期　中間アンケートを含む）

①については、中間アンケートは例年通りの様式で前期が6月上旬、後期は11月中旬から12月初旬に実施した。一方、期末アンケートについては、前年度の検討結果を踏まえて様式を見直し、前期は対象科目数481科目中400科目、後期は対象科目数388科目中300科目で実施された。

見直したのは以下の2点である。これは、「4件法による回答ではどうすべきなのかがはっきりしない」「学生の回答理由が分からないままでは改善の方向性が分からない」といった教員の声に対応することを意図したものである。特に「いいえ」について回答理由を記述するよう求めることにより、授業改善方針を定めやすくするねらいがあった。

(1)授業1回当たりの平均授業時間外学習時間を記載させる。
(2)回答は「はい」「いいえ」のいずれかを選択した上で、その選択理由を学生に記述させる。

改善の成果については、現時点ではまだ後期分の集計前の段階であり、充分明らかにはできていない。ただ、前期分の授業アンケートでは、授業に対する考えというより個人的な感情の発露であり、改善につなげようのない記述も一部見られた。授業アンケートの意義やそこに記述すべき内容について学生が充分理解できるような情報発信等について検討が必要だと思われる。

また、後述する企画④に関連して実施した共通教育懇談会では、「初年次セミナー」の授業アンケート結果について担当教員団内での公表に対する要望があった。これは、「初年次セミナー」の成果と課題を明らかにする上では非常に重要であることから、後期に実施したアンケートの集約が完了し次第、前期分と合わせて報告予定である。

2. 授業改善メモの集約及び教育センターホームページ等での報告

②については、前年度と同様に提出された授業改善メモを集約し、公表した。このことには授業運営に関するティップスの共有という点で一定の意義が認められるものの、実際に集約したティップスが授業改善に活用されているかを把握することは困難であり、成果を挙げているかどうかを評価できない点に課題がある。また、実施から4年が経過し、挙げられるティップスの内容が毎年同じようになってきたとの指摘が高等教育研究開発部会委員からなされた。こうしたことから次年度は、改善につながった事例の収集や授業改善メモの集約及びその公表の仕方について見直しを図りたい。

平成27年度後期分及び平成28年度前期分授業改善メモのまとめについては、以下に掲載する。

平成27年度後期「授業改善メモ」のまとめ

教育センターでは、教員が授業をより良く改善するために、前後期末に学生による授業アンケートを実施している。その結果を踏まえ、授業担当教員から授業改善メモが提出される。この授業改善メモには、教育改善のための有益なコメントや要望等が多数含まれている。高等教育研究開発部会では内容のとりまとめを行い、教育センターのホームページに掲載している。以下に平成27年度後期の授業に対して提出された授業改善メモを、1. 授業改善に向けての試みや工夫、2. 授業改善に関連した意見・要望等、3. その他、に分けて紹介する。

1 授業改善に向けての試みや工夫（文責：歯学部　佐藤 友昭）

各先生の工夫をこちらで分類し（同様の内容は省略し）、列挙している。●のついた項目は各先生からのアンケート文章の内容から抜粋している。各先生の苦心奮闘が示されていた。

1.学生が溶け込み易い雰囲気づくりを重視する。

- 学生が質問し易い雰囲気作りに努力している。
- 教員やTAが積極的にコミュニケーションをとっている。
- 学生の授業参加を促し、満足度の向上に心がけた（語学）。
- 質問に来た学生に長い時間（2, 3時間のこともある）をかけて、勉強の仕方の基本から教えてあげる。
- 教壇に立つばかりではなく、学生の席の間を回って、学生の近くで発音し、真似させることで、学生が聴き取りやすく、授業参加のモチベーションも高まってくる。
- 授業の合間にはドイツ語圏の文化や歴史、自然に関する映像を見せ、言語の背景となる地誌的情報を与えるだけでなく、気分転換の時間としている。

2. 学生個々のレベルを考えて教授法を変えている。

- 学習する必要性を理解させる。
- 流体力学と熱力学は難解な学問であり、いかにイメージを持てるかが勝負だと思うため、具体例などを多く挙げるようにしている。
- 教科書の内容に付け加えて例を多く提示した。難しい証明の議論は、理解は後回しにして気楽に聞くよう促したり、大事な定理は内容を2度説明する。
- 学生の日常生活に照らし合わせながら説明をしている。（理論と実践を繰り返すなかで理解していくことが重要であるから。）

3. 教員側の細やかな対応

- 学生が書いたものに対してはできる限り個別にコメントを返している。レポートに対して添削をするにしても、「なぜこの表現ではいけないのか」「この記述のどこに問題があるのか」を指摘して、理解させるように試みている。

4. 授業内での工夫

(1)学習法の工夫

- 情報活用基礎の最終目標はソフト利用の技法の伝達ではなく、よい卒論を書けるようになるとの観点から、論文の内容と構成について一人一人に批評させ、一方通行の講義からの脱却を目指した。
- ワークシートを毎回準備し、テキストに入る前に毎回Warm Upの活動を行い、その日に何を学習するのかを認識させた。CDを使用し、リスニング、英作文、リーディングを行い、ワークシートを毎回提出させた。またDVDを使用することにより、音声だけでなく、視覚からも英語を理解できるように試みた。
- 受身的な読解作業はできる限り抑え、学生自身がリーダーシップを発揮できるよう、ミニプレゼンや、長いプレゼンなどを交え、毎回、様々な国の学生がテーマを変えて、発表できるように設定した。
- ほぼ隔週の割合で節末問題を宿題に課し、レポートを提出させている。レポートは評価をして返却している。同時に、模範解答を印刷して配布している。
- 150頁程度のテキストを購入させ、これを3回程度に分けて自ら読み、レポートを書かせる宿題を実行している。
- 英字新聞で取り上げられた旬の話題(環境問題等)を題材として、ワークシートを作成して、授業外課題として学習してもらうことを始めた。
- 授業外学習として、English Centralというe-learning学習も毎回行わせ、学生自律学習を促した。
- グループプレゼテーションでは、授業時間外活動も促した。
- ポスターによる発表とパワーポイントによるプレゼンテーションを学生に課した(英語)。
- 2ページ程度の学術論文を1回宿題として与え、それを講義の一環として読みあわせをし、読解力の向上、専門英語への橋渡しをしている。
- 隣席同士でペアを組ませ、会話練習を行うことにより、学生の外国語コミュニケーション意識を高めるよう努めている。

(2)小テストの実施

- 毎回小テストを行う。学生が授業に対する緊張感をもつ。その結果、全体的な出席率も概ね良好であった。
- 回答を明示する事によって、習得すべき内容を分からせることができる。また、未修得の内容を先送りしない、溜めない効果があった。
- 学生自身が、どこが分からないかを自覚できる。
- 演劇作品を取り上げる際に、事前に作品名を知らせてあらかじめ読んでくるように指示し、次回に小テストをしている。

(3)LMS (Learning Management System) の使用

- I will continue to use Moodle, specialty the discussion forum, as a warm-up for class. Using this forum gave students a chance to discuss the topic, making in class time more efficient.
- "Glexa"を利用し、Web上で授業内容のプリントを配布している。授業開始の少なくとも1週間前までには、学生たちがダウンロードできる状態にし、授業に先立ち予習できるように工夫している。
- メールで質問を受付け、数式を要する回答はMoodleにファイルをアップロードする。という形で対応している。
- 毎回のスピーチやプレゼンテーションで、全員が各発表のフィードバックを記入し、教員がそれを回収してPDFに変換し、Moodle上で閲覧できるようにしている。

(4)ワークシートの使用

- 課題ではテキストの内容を掘り下げる内容を問うワークシートを行わせた。
- 問題演習だけでなく、ワークシートも授業中に使用
- ワークシートを毎回配布し、テキストのトピックを深め、自分の考えを英語で表現することも行った。

(5)コアカリガイドブックの使用

- 授業ではコアカリガイドブックを併用している。コアカリガイドブックには、演習問題も付帯されており、授業が終わってからの復習に役立てるようにしている。

5. その他

- 複数種目を実施する際、最も気を付けることが安全面の配慮(体育健康)。
- 毎月1回授業担当者会議を開催し、教育ＰＤＣＡを十二分に行った。(進取の精神)

2 授業改善に関連した意見・要望等 (文責:工学部　平田 好洋)

- 「授業中にスマートフォンでアンケートを実施しますと、回答率が上がるので、より効果的です。」とあったが、そもそも授業中に学生にスマートフォンを使用させることに抵抗がある。また、授業時間は貴重なものであり、授業の改善のために授業時間を削ってアンケートを行うことは、本末転倒であるように思う。授業アンケートの重要性は理解しているが、各担当教員が指示するのではなく、授業時間外に教育センターから学生に一斉に指示し、実施してもらえるとありがたい。
- 授業改善メモを作成することは、授業を振り返り、次回の改善を考えるのに役立つと思う。真摯に学生の意見や要望に応え、授業改善の工夫をしたい。
- 中間アンケートは、授業に対するどのような要望があるのかを教えてくれる良い手立てとなっていると感じる。実際、アンケートに書かれている受講者の声から、その後の授業に何が必要か、どこにもっと重点を置けばいいのか、学生は何を望んでいるのかなど、多くのヒントをもらうことがあり、役立っている。
- 特に必修の科目の内容に対して、内容がむずかしすぎる等の質問は不要である。
- 授業改善メモを作成することは、自分の授業を振り返り、次回の改善を考えるのに役立つと思う。しかし、こうした成果を同じ分野の授業と共有していく取り組みも必要ではないか。もっと組織的に改善できるような取り組みも企画してもらえるとありがたい。
- 受講生は基本的に自分(の意見)を発表したいという欲求を持っており、機会を捉えてアクティブ・ラーニングにつなげたい。
- 今回はムードルでアンケートを取ったのですが、80名前後の受講者に対して12名しか回答がなかった。今まで紙のアンケート用紙でやっていた時には、受講者に対して2/3くらいは回答があったので参考になりましたが、今回は参考にするには回答が少なすぎたように思われました。
- すべて記名アンケートとし、「自分たちの大学をよくするために信念を持って大学・教員・授業を批判する勇気を持て」と教えるべきである。中間アンケート実施の可否より、それが役に立つよう学生を指導すべきだと思う。
- 中間アンケートは、学期の途中で実施されることから、授業の修正が可能となり、授業改善に役立つものと思う。

上に書かれているように、授業アンケートは学生の意見をすくい上げることに有用であろう。実施の形にはMoodleと紙媒体の2種があるが、紙媒体の方がアンケートの回収率が高いようである。また、アンケートの記入には、無記名と記名の2種があり、現状は無記名となっている。記名アンケートを要望される教員もいる。実施の時期も授業中と授業外の2種がある。アンケート結果の科目教員間の共有もまちまちである。従って、教育改善のためには、センターが主体となった実施形態も討議する必要がある。すなわち、(1)アンケートの実施日と実施方法(Moodleか紙媒体のどちらか)を決めて、センターが主体となりアンケートを実施する、(2)守秘義務を前提として記名アンケートも視野に入れ、学生に深い意見も書いてもらう、(3)アンケート結果をその科目を担当する教員グループ内で共有してもらい、グループとしての改善策を検討してもらう、(4)可能な改善策をセンターが責任を持って積極的に実施する、などである。

3 その他

上記の1, 2の項目以外に重要と思われる現場の意見を以下に紹介する。

- 授業に出席しないでMoodleを読んでレポートを書くのも自由な発想だと思う。最初はそういうことも知恵のひとつで結構と思っていたが、途中から「何か書けば点数は甘い」という噂が蔓延したようで、欠席してミニッツペーパーだけ出す学生が1/3を越えた。これに対し、熱心に出席している学生から不満が出た。それを機会に方式を換えたが、反感が強まった。
- 消極的な日本人学生が少しでも英語に慣れるように、留学生2名に対し、日本人学生1名を組み合わせて、座席指定し、グループ討論などが活発に行われるよう、アレンジした。また英語によるプレゼンなどは、日本人学生への指名は学期後半にして、リラックスしてやれるように工夫した。
- この授業は20年くらい担当しており、例年特別よい評価とも言えませんが、まあ平均的な評価だったのが、今年は全体的に評価が下がっており、正直なところ驚きました。考えてみると今回はムードルでアンケートを取ったのですが、150名の受講者に対して21名しか回答がなかった。今まで紙のアンケート用紙でやっていた時には、受講者に対して2/3くらいは回答があったので参考になりましたが、今回は参考にするには回答が少なすぎたように思われました。Moodleで出席を取っているので、それには皆答えても、出席に関係ないアンケートには、あまり答えなかったようです。

Moodleは便利なツールであるが、上に書かれたように必ずしも効果的な結果をもたらすとは、言えない。よりよい利用法を学生と教員の両方に明示する必要がある。また、本学には多くの留学生が日本人学生とともに学んでいる。彼らに対しても効果的な授業のあり方に配慮する必要がある。この点は、これまであまり議論されてこなかった。改善の余地がある。留学生センターとの意見交換も含めて、留学生と日本人学生の両方に有用な授業のあり方を考えなければならない。

平成28年度前期「授業改善メモ」のまとめ

教育センターでは、教員が授業をより良く改善するために、前後期末に学生による授業アンケートを実施している。その結果を踏まえ、授業担当教員から授業改善メモが提出される。この授業改善メモには、教育改善のための有益なコメントや要望等が多数含まれている。高等教育研究開発部会では内容のとりまとめを行い、教育センターのホームページに掲載している。

以下に平成28年度前期に提出された授業改善メモの中から、授業改善に向けての試みや工夫を抜粋して紹介する。また授業改善に関連した意見・要望等もあわせて紹介する。

1 授業改善に向けての試みや工夫

1.積極的参加する意欲を持たせるための工夫。

1) 興味を持たせるための工夫

- 身近な地域課題を取り上げるように工夫している。
- 難易度を徐々に上げるように工夫している。

2) わからない点を早期に解決させるための工夫

- 授業後のミニッツシートに記載された質問に丁寧に答える。
- 出席カードに質問欄を設けており、その次の授業の時に答える。
- 毎回、Moodleで授業内容の理解度と質問を受け付けている。
- TAを活用して授業中に話しかけている。

3) 自信を持たせるための工夫

- 授業時間内に討論する場を提供している。
- 受講生を5人程度の班に分け「グループ予習シート」を提出させる。
- グループ・ディスカッションを行う。
- コミュニケーションをはかるためペア・ワークを頻繁に行った。

2 授業改善に関連した意見・要望等

- 50人程度で顔と名前がわかるくらいが良い。
- Moodleを有効に使うノーハウが蓄積できるような仕組みが必要だ。
- 担当者間で、そのクラスの教育方針や授業内容、具体的な到達目標の共有についてもっと議論を深めないと形式的な授業になる。

文責: 農学部　紙谷 喜則

授業改善に向けての試みや工夫

1.今年度から新しく始まった科目での取り組み･意見など

- 新カリキュラムの初年度だけに、想定外の問題点も出てきた。テキストの効果的な活用や評価基準など、FD研修会で反映できるよう整理したい。
- 初めての講義でマニュアルをこなすこと、時間内に内容を消化することへの対応が優先された。意識して実行したことは、グループ討論中に、グループを回り、うまく進んでいるか学生に問いかけることであった。
- 初めての授業であり、何をすればどのように教育効果が上がるのか、現段階ではわからなかった。少なくともシラバスと教科書に沿った講義を行うことは心がけた。
- 複数コマ開設の複数教員担当による授業であるため、シラバスに沿った形で授業を展開するよう心掛けたが、クラスによって学習レベルも多様であるため、学生の質に応じた内容を調整した。
- マニュアルに固執せず、出来るだけ実体験に即した事柄を学生に伝えるようにしている。
- 同じ内容を複数の教員が行っているが、教員間での授業のばらつきがあるのではないかと感じる。今年度授業を行った教員で、可能な限りでよいので意見交換会を行うことを希望する。そうすることでばらつきが圧縮でき、次年度へ向けてより良い授業ができるのではないかと考える。
- 講義の教科書や授業の進め方などが決められていたので、担当者ごとに、もう少し自由度があれば良いと思う。今期、スタートしたばかりの新しい科目だったので、教える我々もどのように取り組めばよいのか戸惑った部分があり、今年度の経験を踏まえて、次年度は改善していきたい。

2. 学生の理解を促進させる試み

- 前回の講義の内容に関する小テストを毎回実施しており、これにより半年間コンスタントに学習内容を復習し、身につけさせるようにしている。
- テキストの内容を分かりやすく説明するために、そしてテキストの内容を補完するために、講義資料を毎回作成した。とくにテキストの記述が全般的に淡泊であるため、講義資料を利用することで内容の充実をはかった。
- 学部･学科混在型の導入教育では学生による学力差（＝理解力の差）に配慮しながら、できるだけ全員の理解力が高まることが必要だと考える。そのため、スライドを多用しつつ、上位層にはチームとして成果を出すことの重要性を訴求した。
- この授業では、英語の授業にしては47 名と人数が多く、きめ細かい指導はしにくい。毎回１回は授業中に発言できるように工夫をした。また、予習･授業･復習と流れができるように、授業の最後に毎回、授業の内容の要約の穴埋め問題を解かせ、復習として、授業で学んだ課をテキスト付属のe-learning を通して復習させ、次の週には単語テストを行った。

3. 学生に興味･関心を持たせる工夫

- CD･DVDを活用し、リーディングだけでなく、音読やリスニングにも力を注いだ。また今後の生活にも役立つように、教科書には書かれてはいないがその内容に関連した話題提供も心がけた。
- なかなか自分から発言する学生はいないので、授業中はこちらから指名してほぼ全員に答えてもらうという形式をとった。
- ほとんどの受講者が生物志向の学生なので、物理学に対する興味を抱かせることを重視している。そのため、授業で扱う内容を、科学史上での物理的発見と関連させて話すようにしている。

- 学生の専門分野とは直接には結びつかない科目であるため、できるだけ身近なテーマや視点を提示して、学生の関心を引き出せるようにしている。また、一方向的な講義にとどまらず、実際に資料読解の体験をさせることで、歴史学の面白さや難しさを理解できるようにしている。
- 講師の説明だけでは飽きてしまい、また具体的なイメージをつかみにくいことから、説明内容に関連する過去の県政広報番組を視聴する時間を設けている。
- 高校の授業で馴染みのある作品を取り上げ、その歴史的背景、文学史的意義などにわたり踏み込んで講義する。
- CDを使用して学生の興味・関心を呼び起こすようにした。また。グループ・ディスカッションを取り入れて、英語で何かを考える作業が楽しくなるようにした。学生の英語力には多少の差があったが、グループ内で適切なピア・サポートが見られた。

4. 授業改善に関連した意見・要望等

- アンケートにも「何を学んでいるのかよくわからない」という意見があった。もう少し、1クラスの人数を少なくして、教員と学生の距離を縮めると良いのかもしれない。
- 教科書の「事後学習」や「事前学習」については、単元により課題内容が必ずしも適さないものがあった。発表を授業で聴く機会のほとんどない学生が多いため、これを前提とした課題作りを意識したほうがよいように思える。
- 教える側も、事前に自分が教えやすいように下準備が必要だ、という意識付けは必要だと感じる。

文責: 水産学部　江幡 恵吾

3. 共通教育の授業公開・授業参観の実施

③についても前年度同様に実施したのに加え、今年度は新規に開講した「初年次セミナー」を開放して参観の機会を拡充したことでいくらかの参観者増が認められた。しかし、参加者の多くを授業の実施状況把握を目的とした工学系教員が占めている状況であり、本来の目的である授業改善のためのアイデア獲得を目的とした参加者は少数にとどまった。「初年次セミナー」について一定の参観者が得られたことからすればニーズがなくなったとまでは言い難いものの、②と同様に、企画開始から一定期間が経過して企画そのものに形骸化が見られる。次年度は実施方法について検討を進めたい。

4. 共通教育に関するFD研修の立案・実施

④については、「初年次セミナー」の新設を踏まえ、教育センターとして前期開始前の2～4月と後期開始前の9月に説明会を実施したほか、前後期それぞれに担当教員からの意見収集を大きな目的とした共通教育懇談会を実施した。共通教育懇談会では参加者から様々な指摘がなされ、それらのいくつかは翌年度のマニュアル等の改善に反映する予定である。具体的には、成績評価用共通ルーブリック改編や「初年次セミナーⅠ」実施マニュアルにおける学習活動の精査、「初年次セミナーⅡ」ワークブックの書き直しなどが挙げられる。こうした対応は今後も継続して実施予定であるものの、担当教員からは継続的な情報交換の場を求める声が多く寄せられていることから、次年度については比較的小規模で気楽に授業運営に関する情報交流が行えるような場を設けていきたい。そして、その結果として改善が図られた事例についても収集、公表していきたい。

おわりに

平成28年度は、前年度企画を踏襲しつつ、共通教育改革に伴って新設された初年次セミナーに関する研修会を実施するなど新たな取り組みも実施した。各企画への参加および各アンケートの回答、授業改善メモの作成等は、多くの教職員の協力を得て実現したものである。謝意を示すとともに、今後も引き続き協力を願いたい。

その一方、そうした取り組みが実際の教育改善や学生の学習改善にどれほど活かされたかの検証は充分とは言えず、この点に課題がある。FDは実施することに意義があるのではなく、様々な活動が実際の改善につながって初めて意味を持つのであり、今後はこうした点を視野に入れた活動に取り組んでいく必要がある。

最後に、全ての企画を行うに当たっての各学部委員及び教育推進係職員の多大なる支援に感謝申し上げる。

（文責：教育センター高等教育研究開発部　伊藤 奈賀子）

平成28年度　高等教育研究開発部会委員名簿

高等教育研究開発部長	寺床　勝也
高等教育研究開発部	伊藤　奈賀子
高等教育研究開発部	中里　陽子
法文学部	鳥飼　貴司
教育学部	髙谷　哲也
理学部	和田　桂一
医学部	新地　洋之
歯学部	佐藤　友昭
工学部	平田　好洋
農学部	紙谷　喜則
水産学部	江幡　恵吾
共同獣医学部	松尾　智英

事務局：学生部教務課教育推進係

係長	前村　泰子（平成28年6月まで）
係長	黒川　かおる（平成28年7月より）
係員	濱田　麻衣

【外国語教育推進部】

●平成28年度は初めて2回の教員ワークショップを実施した。

1回目は「新カリキュラム（英語IA・IIA、英語IB・IIB）の教授法向上と教材の有効活用に向けて」と題し、参加者が新カリキュラムに対応する教授法と教材の有効活用の仕方を理解し、後期からの授業改善に役立てることを目指した。そのために、英語教員に事前アンケートを実施し、その集計結果をもとに当日の内容に反映させた。

成果として、参加者は後期の授業に役に立つヒントを得ることができ、後期授業の改善に役立てた。また、教育センター英語教員が、学部および非常勤の先生方と意見交換を行い、そこでの意見は、29年度のカリキュラムや推奨テキストリストなどに反映した。

2回目は「英語のクラスにおける授業改善と教授法向上に向けて」と題し、参加者はトピックごとに設けられたグループに参加し、英語の授業で使える教授法を学び、次年度の授業改善に役立てることを目指した。また参加者同士で意見交換を行い、疑問や悩みを解決するためのヒントを得る機会を設けた。具体的には、四技能のトピックとして①Reading、②Writing、③Speaking、④Listening、⑤Presentation、その他のトピックとして⑥Active Learning、⑦Motivation、⑧Equality, Diversity, and Inclusion（修学支援や学習支援が必要な学生への対応など）を設定した。

成果として、参加者は希望する4つのトピックに関して、教育センター英語教員の取り組みと他の教員のさまざまな取り組みを知れ、意見交換ができ、29年度からの授業へのヒントを得た。また、英語で実施されたため、ネイティブ・スピーカーとも深い話し合いが促された。さらに⑧に関しては全教員に知っていただきたい内容だったため、障害学生支援センターより教員を招き、直接、お話をしていただいた。

なお、2回のワークショップでの配布資料やアンケートをまとめたものを教育センターホームページに掲載し、参加できなかった教員や参加した教員がさらに情報を得られるように配慮した。

〈プログラム概要〉

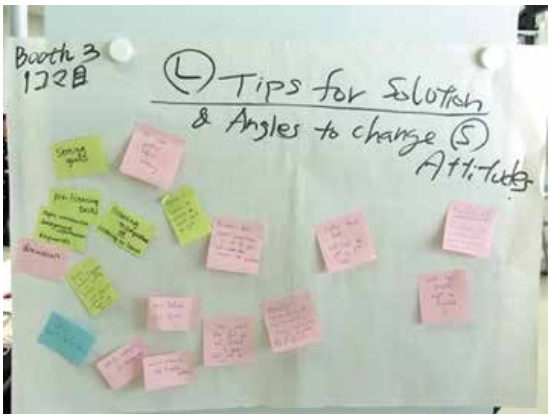
第1回英語教員ワークショップ

テーマ：新カリキュラム（英語IA、英語IB）の教授法向上と教材の有効活用に向けて
日　時：平成28年8月8日（月）13:00～15:00
場　所：郡元キャンパス 共通教育棟1号館4階 Common Room 2
参加者：27名（専任教員14名、非常勤教員13名）

第2回英語教員ワークショップ

テーマ：英語のクラスにおける授業改善と教授法向上に向けて
日　時：平成29年2月14日（火）13:00～15:00
場　所：郡元キャンパス 共通教育棟１号館４階 Common Room 2
参加者：22名（専任教員13名、非常勤教員9名）

グループディスカッションの様子（第2回英語教員ワークショップ）



参加者によるアイデアの書き出し

（文責：教育センター外国語教育推進部　原 隆幸）

Ⅲ

鹿児島大学のFD活動

第2部

各学部・研究科のFD活動報告